

# 山梨産ビールは文明開化の 時代に生まれていた



山の都と称される「甲府」で  
ビール文化の将来性を感じ取り  
日本人として東日本で初めて  
国産ビールを醸造した野口正章<sup>ノグチマサキラ</sup>。  
先駆者としての彼の取り組みとは何か、  
文明開化の時代に思いをはせながら  
「山梨産ビール」の歴史をひもとく。

東日本初の山梨産ビール  
「三ツ鱗ビールのラベル」(山梨県立博物館蔵)



人類の文明とともに進化して、ビールは人々の暮らしの中に根付いていった。

ビールの歴史については諸説ありますが、紀元前3000年ごろにはエジプトで、その後、ヨーロッパでも日常的に飲まれるなど、5000年以上前から人々の暮らしの中に根付いていたといわれています。そんなビールが初めて日本の歴史上に登場するのは江戸時代初期、今から400年ほど前のことです。それでもまだ一般的に出回るようなものではなく、日本でビールを楽しむ文化が広まっていったのは明治時代に入ってからのこと。横浜に居留する外国人がビール醸造所を開設し、日本国内での醸造・販売が始まりました。そして文明開化により西洋の食文化が広まっていく中で、ビールの需要も伸びていったのです。しかし庶民には高価で簡単に味わえるものではありませんでした。そのよ



日本人として東日本で初めて、ビールを醸造・販売した野口正章(個人蔵)

うな中、国産ビールの将来性をいち早く察知し、事業を始めた日本人が現れました。

### 甲府柳町の商家「十一屋」の野口正章が日本人で東日本初の国産ビールを醸造・販売。

「日本ビール産業の祖」と呼ばれるアメリカ人のウィリアム・コーブランドが横浜で1870(明治3)年に「スプリングバレー・ブルワリー」を開設しました。その2年後に大阪で渋谷庄三郎が日本人として初めての「渋谷ビール」を、そして、1874(明治7)年に甲府で野口正章が「三ツ鱗ビール」の販売を開始しました。つまり山梨は、全国で2番目、東日本では最初に日本人がビール醸造を始めた地なのです。

正章は1849(嘉永2)年、現在の滋賀県東近江市に生まれました。野口家は全国に11の支店を有し、「十一屋」を屋号とする近江商人で、正章は甲府に店舗を構え酒造業を営んでいました。家の人からも「西洋狂い」と呼ばれるほど西洋文化に精通し、目の付けどころが一步も二歩も先を行くような豊かな感性を持つ人でしたから、日本でも庶民がビールを飲むようになるの見越し、国産化をすべきだと考えたのです。その後、山梨県内の殖産興業と西洋化を進めた県令・藤村紫朗の後押しもあり、本格的にビール醸造に着手しました。醸造技術はスプリングバレー・ブルワリーをすでに成功させていたコーブランド

に学び、甲府に職人を派遣してもらおうほどの交流も持っていました。原料の大麦は山梨県産を使用。ホップは笹子峠付近に自生していたものを使用しましたが、ビールが腐敗してしまつたため、高価なドイツ産を使うこととなりました。また、当時貴重であった瓶は東京や横浜で集め甲府に運びました。国産ビールの醸造はこうした苦難の末にスタートしたのです。



パースビール  
三ツ鱗ビールの文様は、野口家の家紋・三栢と、当時人気のあったイギリス製パースビールの商標・三ツ鱗(三角形の文様)を掛け合わせたとされている。



東京や横浜への販売を試み、出したビール醸造開業の広告(山梨県立博物館蔵)





明治45年の甲府柳町の風景。この一角に「十一屋」がある  
(山梨県立博物館蔵)

現在の日本のビール産業への布石。  
その先見の明が  
今に生かされている。

正章のビールは品質が優れており、1875（明治8）年の京都府博覧会では銅メダルを獲得するほど世間に認められるものでした。当時の山梨は内陸部の重要な商圏であり、非常に大きな市場もあって商業も発展していたので、正章が山梨でビール事業を立ち上げたことにもうなずけます。しかし当時、まだビールは日本人になじみが薄く、ビール特有の苦味もあまり好まれるものではありませんでした。繁栄していた甲府といえども、今の金額に換算すると一本2000円近くしたため、思うように売れず、東京や横浜に販路を求めたものの事業は失敗に終わったのです。1882（明治15）年、正章はビール事業から撤退しました。先見の明はあったが、始めるのが早すぎたが故の失敗でした。しかしながら、正章の挑戦が日本のビール産業の一里塚となったことは紛れもない事実といえるでしょう。さらに先駆者としての正章の取り組みの中で育った醸造技術を持つ職人たちは、山梨から離れた後も全国各地で活躍し、正章が築いた日本のビール産業の礎を受け継いでいったのです。

そして時は流れ、ビールは新時代を迎えました。クラフトビール時代の到来です。平成6年に酒税法が改正され、ビールの最低製造量が年間2000キログラムから60キログラムに引き下げられたことで、全国各地に小規模醸造所が登場したのです。一時的に巻き起こったクラフトビールのブームは去ったものの、感性と熱意のあるビール醸造技術者たちは、本物のおいしさを追求し続け、独創的な味わいを確立していったのです。山梨のクラフトビールは、東日本における日本人による国産ビール発祥の地という歴史の上に、確固たる存在感を放つビールとして多くのクラフトビールファンに愛されています。



ローマ字表記を添えた野口正章の名刺（個人蔵）



京都府博覧会での受賞メダル（個人蔵）